

## [特集Ⅱ]

### 1. シンポジウム「新しい中等教育学校の構想」

1999（平成11）年5月、教育学部創設50周年記念行事の一環としておこなわれたプレシンポジウム「新しい中等教育学校の構想」を誌上再現する。国公立大学附属学校の中高一貫化政策について賛否両論が出されているなか、名大附属校では中高一貫教育の教育課程を模索していた時期でのシンポである。その後、名大附属校は「併設型」中高一貫校となり、全国の公立学校の中にも中高一貫校が次々に誕生するなど、状況は大きく変わったが、シンポでは中等教育学校の基本問題が取り上げられており、それらは今なお検討を続けるべき諸課題である。なお、登場者の肩書きは当時のものである。（シンポ世話役：50周年記念事業実行委員会委員 今津孝次郎）

---

#### 「新しい中等教育学校の構想」プログラム

---

1. 趣旨 現代教育改革の柱の一つとして、国公立「中高一貫教育」計画が中央教育審議会で2年ほど前に議論されはじめて以来、これまでさまざまな賛否両論が出されてきた。現在、名古屋大学教育学部附属学校では、独自の「中等教育学校」構想を作成中である。そこで、この重要な課題について直接関わってこられた各方面の方々をお招きして、情報や意見を交流し合い、青年前期という発達段階にふさわしい学校教育のあり方について、あらためて考えてみたい。
2. 日時 1999年5月8日（土） 午後1時半～4時半
3. 場所 名古屋大学教育学部 2階 大講義室
4. シンポジウム内容（敬称略）
  - あいさつ 梶田正己 [名古屋大学教育学部長]
  - 基調提案 山住正己 [東京都立大学前総長]
  - 報 告 (1) 永友忠昭 [宮崎県五ヶ瀬中・高等学校元校長]  
(2) 山岡寛人 [東京大学教育学部附属学校教諭]  
(3) 丸山 豊 [名古屋大学教育学部附属学校教諭]
  - 指定討論 安彦忠彦 [名古屋大学教育学部教授]
  - 司 会 榊 達雄 [名古屋大学教育学部附属学校校長]

---

梶田 教育学部長の梶田でございます。土曜日にもかかわらず、教育学部創設50周年記念のシンポジウムにおいでいただき、ありがとうございます。今日は「新しい中等教育学校の構想」というテーマで、実りある成果が出ることを期待しております。山住先生、永友先生、山岡先生には遠くからおいでいただきまして、心から感謝致しております。名古屋大学附属中・高等学校をどのような中高一貫教育の学校にするか、ということが私達の大きな課題になっておりまして、是非

皆様方のお知恵をお借りしてより良い学校の構想ができたらと思います。どうぞよろしくお願ひします。

榊 司会を担当いたします附属学校長の榊です。最初に山住先生から基調提案を約30分お願ひします。続いて3人の先生方からそれぞれ20分ずつの報告をお願ひします。その後、10分ほど休憩した後、安彦先生から10分ほどの指定討論をお願ひします。その後、討論に移りたいと思います。

## 基 調 提 案

山住 私は6年制の中等学校に通った経験があります。どういうことかといえますと、1943（昭和18）年、旧制の中等学校に入学しました。1948年新制高校発足により、旧制中学5年生であった私達は新制高校3年生に編入しました。ということで、結果として私達は同じ中等学校に6年間在籍したことになります。私はこの6年間は決して長いとは思いませんでした。現在、中・高一貫教育の6年間は長過ぎて途中で中だるみする、という意見があります。しかし、それは6年間という長さではなくて、その間にいかなる教育をするか、クラスをどう組織するかなどの内容こそが問題だと私は思います。

高校を受験する15歳という年齢は、子どもから大人への過渡期ですから様々なことに悩む不安定な時期です。そうした時期に入学試験を受けるということは、不適切なことだと思います。特に現在は90%以上の15歳が高校へ進学するわけですから、過酷な入学試験は青年期を混乱させ、貧しいものにしてしまうでしょう。そこで中学と高校をつないだ方が良い、と考えます。

では、義務教育をどうするのかという問題が出てきます。義務という言葉は「教育を受ける権利」として考えてはどうか。例えば中学2年で一旦学習を止めて何らかの職業に就き、何年か後に復学することがあっても良いのではないか。つまり、画一的な小中学校9年間の義務教育ではなくて義務教育自体を捉え直す6年間の中等学校を創り出してはどうでしょうか。私自身は6年間の中等学校に在籍したという経験を持っているので痛感するのですが、6年間の一貫だと友人との人間関係もきわめて充実したものになります。

### 都立大学附属学校の改革

東京都立大学の附属高校は大学全体の附属ですから、校長もいろんな分野から選ばれます。人文学部、理学部、工学部から約3年交代で校長が出ますので、附属高校の先生もいろんな刺激を受けます。ただ、校長が出ない法学部と経済学部はあまり附属には関心を持っていないのですが。

もっとも我が附属高校は、東京都教育委員会が管理している一都立高に過ぎないので、大学はあまり高校に影響を与えられないのです。東京には学区があって、学校群があります。我が附属高校もその学校群に組み込まれ特色が出せない。東京では私立に行く生徒が多く、成績上位者と下位者が私立へ、中間の生徒たちが都立へ行くという傾向がありますが、こうしたゆがんだ現象を正していくのも中等教育学校にとって重要であると考えます。

今から10年ほど前、新しい教育長が「特色ある都立高校を創ろう」と提唱しました。そこで大学でも積極的な改革案を考えようと、附属高校のあり方を検討するワーキング・グループが生まれました。いろんな案が出されましたが、例えばある学級全員がそのまま理学部や工学部へ進学

する、という高・大連携の案です。理学部や工学部側も乗り気になりました。これは理科離れを防ぎたいがための案ではないか、とも言われたのですが、そうではなくてあくまで高・大連携を確立させようという意見でした。しかし公立大学の附属学校が大学との関係だけに重点を置く、という方式で学校運営をすることは公立学校としてふさわしくないという反応もありました。そこで中高一貫校への転換をはかったのです。移転に当たっては八王子近辺で土地を何とか確保しよう、という要望も出たほどです。最初は乗り気でなかった東京都教育委員会にも中高一貫校を創ろうという動きがはじまりました。一つは多摩地区で都立大附属校を中高一貫校にする。そして23区においても徐々に広げていくという方向です。

附属学校を中高一貫校に転換することについて都立大学の合意を得ることは容易ではありませんでした。附属高校の存在意義を認めないとか中等教育に関心がないなど、議論はあまり進みませんでした。昨年ようやく第2次案までこぎつけました。私はこの3月に退職しましたが総長の後任はワーキング・グループ座長の荻上紘一氏（理学部・数学）で、高校非常勤講師の経験もあるので高校教育に関心があり、中高一貫校プランを動かしてくれるものと確信しています。東京都立としては高校の統廃合問題を抱えており、財政難もあって順調に進むことは不可能に近いと思いますが、中校一貫化は進めて行くほかないと思います。

#### 多様な中高一貫校の試み

さて、冒頭で申し上げた通り青年期の問題として「三・三」に区切るのは好ましくありません。多くの方が経験しているように、15歳の頃自分が自主的に取り組みたいことを発見します。文学であれ、美術であれ科学であれ各自の関心が深まるのがこの時期です。思春期という悩み多き年代に入試は避けるべきです。

もっとも6年制にすると、中だるみが生じると言われます。東京では特に私立大学附属校にそれは多く見られます。しかしそれは教職員集団の取り組みによって克服は可能であると考えます。現在の「六・三・三制」はできてから50年以上経っています。50年以上変わらないというのは1872年の学制以来ありません。これまで制度に支障があったら変えてきたのです。そろそろ変えなくてはならない時期に来ていると思います。

実験的にいくつかの6年制中等教育学校を創り、うまくいけば制度改正に持っていったらいいと思います。全国一斉に画一的に変えるのではなくて、都道府県ごとに様々な動きを創り出し、各地で多様な形態の中・高一貫教育の試みがあって良いと思います。

榊（司会）ご自身の経験を踏まえながら、基調提案として基本的な重要課題を提示していただき、ありがとうございました。では、次に三つの個別報告に移りたいと思います。最初は、五ヶ瀬中・高等学校初代校長の永友先生です。

## 報 告 1

永友 私は平成4年4月1日に県立学校教頭から、県教育委員会勤務を命ぜられました。2年後に学校を創る仕事を与えられたのです。教育委員会の窓際で最初は途方に暮れましたが、すぐに頭を切り換えて開校に至るまで一心不乱に取り組みました。

最初に、何故中高一貫教育を目指すのか、その背景にある一般的な問題を整理してみたいと思います。

日本の学校教育は、確かに今日の物的な繁栄を支える人づくりに貢献したとは思いますが、学校や教室、あるいは教師を貫く基本的に保守的な体質は今の時代の要請に対して十分に答えられなくなっています。個性重視と特色ある学校づくりということが文部省をはじめとして各方面で叫ばれてはいますが、現場にいる限りほとんど変わっていないのが現状です。口で言うだけでなく、思い切って何かを変えていかなくては駄目なのです。また学習指導要領にしても、10年ごとに改訂はされるのですが、目の前の時代変化にすぐさま対応できるようなものではありません。

幸いにも社会全体に規制緩和の流れが現れてきました。この流れの中で思い切った教育制度の見直しをしないと、時代の流れに対応できないのではないかと思います。

時代の流れは、ますます多くの教育的課題を突きつけています。豊かな社会を実現した後、子どもたちに対して新しい夢や理想を語るべきなのに、今の学校にはそうした雰囲気欠けています。また、家庭や地域社会の教育力の欠如が見られることも各方面で指摘されていますが、そうした状況だからこそ学校教育は積極的に子どもたちや保護者に働きかけていかなければならないと思います。

こうしたなかで、中高一貫教育は、これまでの学校の形態をかたくなに守り続ける教育の保守性を打ち破り、現在、日本で求められている教育的課題に応えられる学校づくりの突破口としての意義を持っていると考えています。

次に、五ヶ瀬の中高一貫教育の具体的な取り組みについてお話ししたいと思います。

#### 五ヶ瀬の取り組み

まず建学の理念ですが、何と言っても自然に対する畏敬の念を育てることがこの学校をつくる重要なポイントです。そして感動の教育を目指し、感性を磨くことです。例えば開校して2年ほど経ったとき、杉の大木を倒すのを見た生徒たちが「あの木がかわいそう」といった声を出すようになったので、感性を磨く取り組みの成果があったのではないかと感じています。また、今の若者には冒険心や野性味が欠けています。それらを回復し、育成することも目標の一つです。そして、もちろん個性を発見しその伸長をはかることも重要です。このような目標を実現するには3年間では時間的に不十分で、6年間という気長い取り組みが必要だと考えます。

さて個性の育成についてですが、個性の発現を掴むのは誰なのか。それは親と教師です。そうならないような取り組みを心がける必要があります。1年経ったときにクラスの一人一人の個性が言えますか、と担任教師に問いかけました。それが言えるように努力すべきです、と私は話しかけてきました。

そして個性を発見しやすいような条件整備をはかることも重要でしょう。たとえば、子どもたちが自然に活動できる異年齢集団を保障することです。同じ年齢の子どもたちばかりが集まって何かをするというのは不自然だと思います。6年間だといろんな年齢が交じり合うことが可能です。これまでも異年齢で構成する部活動はありましたが、それも何らかのスポーツなどを共に行うような異年齢の同質集団です。そうではなくて、あらゆる方向に向かっている異年齢の異質な

集団で活動をする大切さのことを言っているのです。

あと、実践の中から感じたことについていくつかお話しします。

まず感じたのは躰に関わることです。今の子どもの躰は非常にだめになっています。自分の物と他人の物の区別をしない。平気で他人の物を使う。物を大切にしない等々。恐ろしいのは金銭感覚です。しっかりした指導のできない保護者もいます。五ヶ瀬は全寮制なので小遣いは月5千円と決めていました。ところが高価な買い物をする中学生がいる。親が郵便局のキャッシュカードを持たせて、子どもはボタンさえ押せばお金がおろせるようになっている、そういう子も親もいるのです。さらには時間の感覚が乱れています。これは恐らく朝起きる時間から、夜寝る時間まで、母親が指示をしていることが原因ではないでしょうか。しかし親から離れた全寮制の中では、子どもたちは生活の自立ができるようになります。

#### 全国の反応

さて、五ヶ瀬に対する全国の反応です。私がいた2年間で500団体、約5000人、北海道から沖縄まで、文部大臣も含めてありとあらゆる分野の人が見学に来てくれました。その中で、実に多くの悩みをうち明けられてきました。どうして硬直した教育制度をそのままにしておくのか、と感じないわけにはいきませんでした。例えば、生きるか死ぬかといった深刻な問題を抱えた子どもを受け入れてもらえないだろうか、という相談さえありました。残念ながら宮崎県民という条件があるし、抽選もあるので、希望者全員を引き受けられないとお答えするほかありませんでした。あるいは自治体の悩みとして、人口減で高校が消えようとしているが、何とかならないだろうかという悩みもありました。中高一貫校が一つの解決策では、と助言したこともあります。

お話ししたいことはまだたくさんあるのですが、時間が過ぎたようですので、ひとまず報告を終わらせていただきます。

榊（司会） 全国的に有名な五ヶ瀬の取り組みについて、具体的に紹介していただき、ありがとうございました。では次に、東大附属学校の山岡先生をお願いします。

## 報 告 2

山岡 私どもの学校は中野区にあります。渋谷区、新宿区、杉並区に囲まれた所です。学区は23区と10ほどの市となっております。大体1時間ほどで通学できる範囲となっております。生徒数は1クラス40人で3クラスで各学年120人、6学年で合計720人が定員で、完全な中高一貫です。しかし制度的には中学と高校は別ですから、具体的にどんなことが起きているかということ、中学から高校へ進学する際建て前上、入学検査があり、入学金を取る、試験はやらなくても検定料は取る、入学金も取る、というようなことをずっとやってきたわけです。

先程は山住先生から昔の話がありましたが、私どもの学校は東京高校という旧制の7年制の学校が前身で、7年制高校のうち、最初の尋常科4年のうち3年を引き継ぐ形で、1948年に開設されました。昨年に創設50周年を迎えています。附属学校の開設の後に教育学部ができましたから、教育学部より古い歴史を持つこととなります。120人のうち、双生児を積極的に受け入れてきて、研究テーマにしたことは、皆さんもご承知の通りです。

## 「特別学習」

中だるみは教師の責任だ、という指摘がありました。私も全くその通りだと思います。私どもも中だるみを何とかなくそうと、1966年から30年以上に渡って中・高6年間を2年ごとに区切って授業を行い、2年ごとに担任を持つ取り組みを続けてきました。私は現在中学3年の担任ですが、来年はそのまま高1の担任へと持ち上がります。教師全員が中・高の授業を持ちます。したがって授業の組み方の中で、1時間目に中1の授業を行った後、次の時間には高3の選択授業をするということも当然あるわけです。私は生物の教師で東大附属に来る前は、千葉の公立高校で教えていました。附属に来た時、小学校を卒業したばかりの生徒が校舎の中で鬼ごっこをしている様子を見て、大変戸惑ったことがあります。ですが、今は全く違和感がありません。まだ幼児・中学1年から、おじさんおばさんのような高3まで一緒に体育祭をやった時なんか本当に面白いですよ。

余談はさておき、2年ごとに区切って教師が工夫してやってきたことの中に「特別学習」がありました。これは教科の学習以外のいわば「総合的な学習」にあたります。中1・2年の2年間で生徒たちは自分達の関心によってグループを作り、図書館などで自ら調べます。その成果を2年の区切りの学年行事で発表します。私達はこの行事を「ファイナルコース」と呼んできました。次に中3・高1では、教師が提示したテーマを選択して、2年間学習します。そして高2・3年では「卒業研究」を課しています。2年間一つのテーマを研究し、最後に「論文」にまとめます。中には卒業「制作」もありますが、教師は週に1回それらの進行状況の面倒を見ます。他の教科がいくらよくできても、この卒業研究ができなかったり、不十分だと卒業できないというように重要な位置づけをしてきました。それから、まだ歴史は浅いのですが、中3では余裕のある時に農作業や展示などの「総合学習」を行なっています。

このような教科以外の学習をたくさん行なって、その成果をまとめさせ発表させています。教科で学んできたことを、こうした学習を通じて総合的に活かすことが要求されますので、生徒たちは中だるみすることなく6年間を過ごすことができるのではないかと考えています。

## 中高一貫教育のメリット

これまでは制度的に中学と高校は別でしたが、新たに中高一貫教育が認知されることになりました。私達は今まで実践してきたことを新しい制度に乗せればいい、と簡単に思っていたのですが、大変な問題もありそうです。東大附属の役割として、全国の学校にとって意味のある教育実践をやっていると世間に認知してもらう必要があるわけで、これまでやってきたことをそのまま新しい制度に乗せていくだけで良い、というものではありません。新しい道を常に探らなくてはならないわけです。

中等教育学校に移行するには、私達のやっている中高一貫のメリットを最大限に生かしたいと考えます。一番大きなメリットは高校受験がないことです。受験があるといわゆる「主要5教科」に振り回されますが、本校では全ての教科の学習に熱心に取り組むことができます。そして第2に6年間ありますから、焦らずにゆとりを持って学習に打ち込むことができます。第3に教科以外の活動にも生徒たちは熱心に取り組むことが可能です。第4に2年ごとの区切りの中で、一つのレポートを完成させるためにじっくりものを考えてまとめ、発表する力がつくはず。また

第5に中学と高校の学習を、展望を持ってつかむことができます。中学生にとっては高校での学習の様子を示す見本が、良い意味でも悪い意味でもすぐそばにいるわけです。

中高一貫のメリットは教師にもあります。6年間生徒をずっと見ていくことができます。学習面では中学・高校両方の授業を持っていますから、子どもがどこでつまづいているか、中学校のどの内容が高校ではどういうところにつながっていくのかなどを、実践の中で常に意識することができます。第2に高校の授業の中では、教師の専門性の意味を捉え直すことができるのではないかと思います。カリキュラム開発をしていく際に、教師は何らかの視点を出すことができるように感じますが、これは教師の力そのものが問われている点だと思います。その点が本校の場合、完璧かと言われるとなかなかそうは言えません。今後の課題です。

さて、これから中等教育学校を目指す場合、これまで50年やってきた延長上で何か新機軸を出すのは正直言って大変です。これまでやってきたことを総括してみると、二本立ての方法に意味があるように思われます。一つは6年間を通した教科の学習です。もう一つは「特別学習」で、今後は「総合学習」と呼ぶことになると思いますが、これら二つを合わせて「知の総合」として位置付けたらどうだろうか、と考えているところです。

2年ごとの区切りは「基礎」「充実」「発展」の三段階になるわけですが、最初の基礎段階である入門の時期には五つの力を重視していきたい。つまり言葉、論理、身体・表現、情報、関係という五つの力を総合学習および教科学習の面でも習得させていきたい、と考えています。次の充実期の2年間でこれらを創造し、最後の発展期の2年間で自己の確立を目指したいと考えます。

そして言うまでもなく、東大教育学部だけではなく知の最高総合学府である東大の教授らの協力を求め、例えば、高2・3年の発展段階で選択授業をやらせてもらっても良いのではないかと、そんなことも構想しています。「知の総合」を目指して、生徒たちに新しい文化を創造する力を身に付けて卒業させてやりたい、と私達は願っているわけです。

榊（司会）東大附属の具体的な実践を詳しく紹介しながら、中等教育学校の今後の基本方針について重要な指摘をしていただきました。どうもありがとうございました。次に名大附属学校の丸山先生からご報告をお願いします。

## 報 告 3

丸山 今までのお話の中では中高一貫教育はバラ色で、非常に良いものではないか、といった論調でしたが、そうした点を踏まえながらも、問題点はどこにあるか、ということをお話したいと思います。

中高一貫はおいしい話ばかりではありません。先立っても全国附属学校集会在奈良女子大学附属中・高校で行われました。そこで組員が本音で発言し、中等教育学校構想は教育の複線化に道を開くものであり、教育基本法の精神とは相容れないという批判が出されました。「国立の附属中・高はその尖兵となるな」「国立の中高一貫校はどうあるべきか」「国立の附属高校がありながら、何故併設附属中学と断絶しているのか」といった「あり方」論議が高まりました。今、国立大附属中高で中高一貫に名乗りを上げているのは、我が名大附属と東大附属、奈良女大附属で、

後は立候補していません。例えば筑波大駒場中・高などは名乗りを上げていません。多様な生徒を受け入れるという入口の問題が中高一貫のネックになっているようです。名大附属の場合は校長先生も学部の先生方も総じて積極的で、本来あるべき附属の姿は中等教育学校を目指すことにある、ということが大前提になっていると聞いていいでしょう。

### 中高一貫教育の諸問題

では名大附属はどうなるのか、という点です。五ヶ瀬と東大附属は中高各学年3クラスの「寸胴型」ですが、名大附属は中学2クラス、高校3クラスのアンバランスな「併設型」を目指すこととなります。そこで私達の課題は中3と高1の「接続問題」にあります。ただそれはデメリットというよりメリットとして捉えるべきではないか。先程は山住先生から「中だるみ」は教員の問題だという話がありましたが、それだけではない部分もあるように思います。例えば何故学ぶのかという課題も、現行制度のなかでは高校受験や大学受験を前提にしている場合が多いわけです。しかし中高一貫ではそうした進学とは違う学習目的が問われてきます。「併設型」を目指す場合は、余計に学ぶ目的が検討されざるを得ないわけです。

そして多様な生徒が入ってくると、6年間では学力差が歴然とするという事実があります。この差異の中で各自が自分の進路や生き方を見つけることが重要になりますが、これも中高一貫の大きな課題の一つです。

さらに特に今の中学生は複雑な人間関係の中で、常に悩みを抱えています。6年間ではそれが否が応でも続いてしまう、という問題があります。

また教師と生徒の中に、変な馴れ合いができてしまうことがあるかもしれません。さらには、先程山岡先生が公立高校から附属へやって来て、中学生の様子に戸惑ったと言われましたが、中高一貫の教師の中にはいわゆる高校型教師と中学型教師がいます。その中でどのような教員集団を作るのか、これは今後の最大の課題であり、学校運営上も重要な課題です。

もう一つ、私立学校の中高一貫のあり方の問題です。私立の多くの場合は「2-3-1」というやり方をとっています。最初の2年間で中学の内容を済ませ、次の3年間で高校の内容をやり、後の1年は受験準備という進め方です。五ヶ瀬と東大附属は「2-2-2」で基礎・充実・発展という進め方です。我が名大附属の場合は高校で1クラス増えるため、どうしたら良いのかを検討した結果、前校長の安彦先生たちの助言もあって「1-2-2-1」という位置づけを構想しています。

いずれにせよ、私立、公立、国立、それぞれの中高一貫教育のさまざまな教育課程がありますから画一的に行う必要はありませんが、多様な形態をどう調整するのか、という問題は残ります。

本当にゆとりが存在するのかどうか、総合学習を含めてどのような教育課程を創り出し学校の活性化に繋げることができるのか、といった諸点での、多様なタイプに即した検討が求められてくるでしょう。

### 中高一貫教育の教育課程づくり

さて名大附属の「併設型」中高一貫教育の教育課程づくりのポイントです。中高一貫は個性の伸長を目指す、というのが安彦プランです。カリキュラムの基本方向として自分を知って探り、伸ばしていく、そして社会的に自立をしていくという目標を目指します。学習形態も学び方の基



礎から始め、系統学習や参加型学習などさまざまな形をとります。新しい指導要領では選択の幅が広がりますから、選択学習を通じてどのような自立的な学習をしていくかが大きな課題になります。本校では特に高校1・2年の段階を重視しないと、併設型のメリットが生かせられないのです。

一方、中・高一貫の問題として登場するのが生徒たちの自治能力についてです。中学生は部活動や生徒会など、何かと高校生に頼ってしまう傾向があります。本来なら自分達のことは自分達で、という中3も上に高校生がいることを意識してしまう雰囲気があるのです。自治能力を身に付けて社会性を発揮するようにするはたらきかけも課題の一つでしょう。

また「こころの教育」がよく言われますが、この点については教育学部の、心理学系の専門の先生方のバックアップを得て、カリキュラム化していきたいと考えています。

もう一つは生き方の問題です。「生きる力」と言われますが、それは単なるサバイバルではなく、新しい21世紀に向かってどういう社会を築き上げていくのか、そこに自分の人生をどう重ねていくのか、というのが「生きる力」だと考えます。私達は「総合人間科」を通じてフィールドワークを行い、社会の現実と関わりながら自主的な能力を開発していきたい、と考えています。

要するに二つの柱となるカリキュラムが「総合人間科」と「ソーシャルスキルプログラム」です。「総合人間科」は既に何年もの間実践してきていることですが、そこには「生き方を学ぶ」「生命の問題」「平和の問題」という三つの課題があって、「平和の問題」については「共生」ということを念頭に置きたいと私自身は考えているところです。

「ソーシャルスキルプログラム」についてですが、「ソーシャルスキル」という言葉は適切であるかどうか検討の余地がありますが、自分の心と身体、社会的な人間関係をどのように創り上げるかという課題を探るカリキュラムです。これはまだ出来上がっていないので、どう具体化するかはこれからの検討課題です。

「併設型」を考えますと、附属中から上がってきた高1と他中学から入学してきた高1とを、どのようにミックスしていくかという困難な問題があります。クラス編成や男女比のことも考えねばなりません。ミックスはプラスなのかマイナスなのか、私は新しい個性が入ってくることでぶつかり合い、いわゆる「中だるみ」を乗り越える活性化をはかることができるわけですから、決してマイナスだとは思いません。

今回の学習指導要領改訂の次にくるのは、恐らく教科の再編統合でしょう。どのような教科を創っていくのか、中等教育学校の構想はその課題と重なってきます。例えば「心と身体健康科学」や「情報・メディア」、「表現」、「国際コミュニケーション」といった、「融合カリキュラム」(新教科群)と私達が呼んでいる科目の開発を検討していきたいと考えています。

#### 大学との連携

そうした開発には、モノやカネ、そしてヒトが必要です。教育学部附属でありながら名古屋大学全体の附属という考え方で支援を求めていきたいと思います。もちろん現在でも名古屋大学は本校に関心を持ち、積極的に協力してくれていますが、大学キャンパス内に附属学校があることは全国でも珍しいわけですから、生徒たちが大学の講義を聴講するなど様々な試みを推進していきたいと思います。

とはいえ、ここで問題になるのはやはり「入口」と「出口」です。「入口」は多様な生徒をとれば良いわけですが、「出口」は高大の連携の問題になります。「出口」の問題として大学が中等教育学校をどう評価するか、特に教育学部にも新しい連携のあり方を検討して欲しい、と提案しているところです。

五ヶ瀬のように公立の中・高一貫校の多くはゼロからスタートしています。それには苦勞も多いでしょうが、思い切った改革ができます。しかし名大附属や東大附属のように、現に存在するものをどう創り替えるかとなると難しい面があり、そこを乗り越えて全国の中等教育学校のモデルにならなくてはなりません。そのためには学校の名称を変えるだけでは駄目で、附属と大学の絆を強化していくことが求められます。大学の先生が附属で授業をしたり、研究成果を附属学校の実践の場に活かしていくなどの取り組みが重要です。今日こうして話ができるのも、名大教育学部の全面的な支援のおかげであり、機会が与えられたことを嬉しく思います。こうした関係が一層発展するように願っています。

榊（司会） どうもありがとうございました。「併設型」を中心に中高一貫の問題点や課題を具体的に提起していただきました。以上で三つの報告を終わらせていただきますが、もし簡単な質問があればお願いします。

フロア 名大附属の報告に関してお尋ねしますが、カリキュラムを創っていく上で何が一番難しいことでしょうか。

丸山 それは教科のエゴイズムだと思います。つまり先生方は自分の担当する教科に誇りを持っていますから、教科統合ということになれば抵抗が起こります。それを乗り越えられるかどうか、ポイントだと私は考えます。

榊（司会） 他にないようでしたら、時間も少し遅れておりますのでここで10分間の休憩をとった後、次の指定討論に移ります。

## 指 定 討 論

安彦 私は後の討論に向けて、いくつかの論点を整理したいと思います。まず、議論の基本姿勢について二つのことを提起したいと思います。第一は中等教育学校については研究者の間でも意見が分かれている点です。私自身は賛成派なのですが、中等教育学校に反対する方もいます。附属学校は実践研究をやる場なので、新しい実験はどんどんやるべきだと考えます。もちろん失敗が起きる場合の手当をしていく必要がありますが、実験そのものは推進していくべきでしょう。この中等教育学校の試みも附属学校である以上、やってみるべきだと考えます。

第二は戦後50年以上が経って、今ようやく国民一人一人が与えられた民主主義について主体的に考えねばならない段階に入ったのでは、と感じるのです。教育について言えば親の教育権と子どもの学習権の二つの観点から捉える必要がありますが、子どもの学習権はもちろんのこと、親の教育権についても自ら教育権者としての経験を積んでいくという方向で捉え直すことが重要だと考えます。中等教育学校についてもそうした観点から前向きに取り組むべき課題ではないでしょうか。

以上のことを押さえた上で、三つのご報告を聞きながら、基本的な論点をまとめてみますと、中等教育の固有の役割は何かという点に収斂すると思われます。これは私の年来の関心であり、私はとくに初等教育との関連に関心を持ってきたわけです。

歴史的にみても、中等教育というのは高等教育に向けた準備段階として一部の人達の教育機関でした。それが近代化されるなかで庶民の教育として、初等教育に続く第二段階目の、それこそ英語でいうセカンダリーな教育として位置づけられるようになりました。ただここに複線型の問題が絡んできます。アメリカはよく単線型と言われますが、地方分権が重視されており、地域によってシステムが異なります。六三三制の所もあれば、五三四の所もあり、四四四の場合もあります。さらにオルターナティブ学校という例もあり、それだけに保護者がどの学校を選ぶかについてかなり自由な土壌があるわけです。イギリスをはじめヨーロッパでも総合制学校がありますが、全てが総合制だというわけではありません。多様な学校システムが並存しているわけです。日本では最近になってやっと典型的な総合制が登場しました。戦後の学校制度が単線型だと言われてきましたが、高校では普通科と職業学科に分かれ、私に言わせればそれこそ一種の複線型だのように思います。ですから、中等教育学校構想が単線型を壊すという意見には賛成しかねます。

第二に、中等教育だけに前期と後期があるのは何故か、という点です。前期というのは「自分探しの時期」であって、自分を探る体験を積んでいく必要があるのではないかと。そして後期において自分の興味、関心を絞り込んで、生き方を選択するのではないかと考えます。中等教育は「自立と個性」を育むのが課題であり、「生き方」が核になります。その際、第一に選択的な経験、第二に自治的な経験、の二つが重要な教育課題になってくるでしょう。

時間がありませんので、とりあえず論点の整理をさせていただきました。

榊（司会）ありがとうございます。巨視的かつ比較の視点から中等教育に関する基本的な論点を提起していただきました。それではこれらの論点に関してもよろしいですし、三つのご報告、そして基調提案に関してでも結構です。残された時間がごくわずかになりましたので、どうぞ自由に御質問や御意見をお出し下さい。

## 討 論

山住 立ち入ったことを山岡さんにお聞きしますが、東大教育学部は中等教育学校構想に反対なのでしょうか。

山岡 差別・選別の複線化に繋がる、ということで反対の意見も出ました。その後様々な討議を経た後、附属の教官が本当にやる気があるのであれば、ということで中高一貫教育に踏み出すことが決まったところです。

フロア 私はつい最近まで公立中学校の教師をやっていた者です。イギリスには「イレブンプラス」問題というのがあったと聞いています。15歳に全く選別をしないということが理想なのでしょうか。

榊（司会）関連する御質問や御意見があればいくつか出していただいて、各報告者からまとめてお答えいただきたいと思います。

フロア 大学の教師です。中等教育学校のプランは了解できます。ただ「中だるみ」の問題ですね、これは何を基準にして捉えていけばいいのでしょうか。

フロア 大学で教育を研究しています。「完成教育」という観点から高校教育を捉え直すことも重要ではないでしょうか。「完成教育」についての言及がなかったので、コメントをお願いします。また「複線化」が問題であると言われていますが、六三三制が六六制になるという点に注目すると、複線化という言葉の使い方が理解しにくいのです。さらに名大附属と東大附属では、これまでいわば中高一貫でやってきているのに、今回の中等教育学校化でどう変わるのか、単なる看板の書き換えではないとすれば何が変わるのか、以上三点をお聞きしたいと思います。

榊（司会）それでは報告者の方々からそれぞれ関連する点について、お答えいただきたいと思えます。イギリスの「イレブンプラス」の問題が出ましたので、最初に私の方から事実経過だけお話しします。「イレブンプラス試験」は国語・算数・知能テストで構成されました。事実上は国語と算数の内容は知能テストとあまり変わりません。事前の準備も必要ないし、将来の能力も判定することができるということだったのですが、多くの教育学者や心理学者は、練習すれば知能テストの成績は上がるし、11歳で将来を決めてしまうのは問題である、としてこの試験に反対しました。この知能テスト批判はコンプリヘンシブスクール運動と結び付き、1960年代以降に総合制中等学校が普及し、イレブンプラス試験は行われなくなったわけです。

山住 学校教育の括り方ですが、無着先生などがいた私立明星学園ではかつて四四四制をとろうとしたことがあります。ただ、他の公立学校との関係で難しかったようです。

永友 五ヶ瀬でも文部省の強い指導があって、入学時に学力検査はできません。ただ全寮制ですから、共同作業の適応性について簡単なテストをしたことはありました。また五ヶ瀬では座学を繰り返すのではなく、例えば地域の名人に来てもらったりして変化に富んだ授業をしていますので、「中だるみ」については全く心配しておりません。「完成教育」についてですが、五ヶ瀬では2年間、全員が大学から専門学校まで多様な形で進学しましたが、進路は全く自由というのが基本です。また複線型批判についてですが、エリートコースなら既に全国にいくつか存在します。山の中にそんなコースを作っても特色は出ません。こちらの説明不足もあって、保護者の中にはエリート校だと思いついていた人もいたようですが、他方、本来の純粋な教育を願っている人もたくさんいます。五ヶ瀬はもともと同じ敷地内に中学と高校の別組織が作られて4年ほど続きましたけども、今年から中等教育学校になりました。つまり組織は統合され、教科内容についても指導方法についても全てが連続しており、生徒会活動でも部活動でも、心身の発達段階の違う中高生が一緒に行う、という形になったのです。したがって中学・高校が同じ敷地内にあることと、中等教育学校とは違うのです。

山岡 結局、50年続いてきた国立大学附属の存在意義が問われているのだと思います。これからも50年存続し続けたい、と私達は願っているわけです。新しい制度に移行することによって、これまで決して十分ではなかった人的・物的状況から抜け出したい、という考えもあります。

丸山 まず「中だるみ」問題ですが、現象としてその存在を否定することはできません。生徒の側に立ったときに、目標を見失ったり、見つけられないときになりやすいのだと思いますが、一方では、生徒の内面における発達の節目を専門研究から知りたいし、他方では目標を把握しやすい

ようにカリキュラム上でフォローする必要があると思います。本校は創設以来「完成教育」を目指してきましたので、中高一貫教育に変わっても目標は変わらない、ということの確認が必要です。これまでもある種、中高一貫でやってきたわけだから現状のままで良いではないかという意見ですが、私達の中にもそうした考えはあります。しかし、山岡先生が言われた条件整備ということの他に、学校は常に学校づくりとして取り組み続けていく必要があるとすれば、私達がこれまでやってきたことをさらに発展させていく良きチャンスではないか、とも感じます。従来の足かせを取り払い、より自由に学校づくりを推進することが保障されるのではないかと思います。中等教育が大きな問題を抱えているだけに、本校が学問的な裏付けと地域の学校との情報交換の場となるような見通しを持ちたい、と願っています。

安彦 先ほど申し上げた親の教育権に関して、多様な学校の中から行きたい学校を選ぶ権利と、学校が地域と連携しながら改善を図っていくという二つの観点について補足説明します。学校の選択については、競争によって平準化した学校教育の質が壊されるのではないかという危惧が叫ばれています。イギリスでは、この二つの観点は対立的に捉えられていますが、両者は結びつくこともあるような気がするのです。実際、名大附属も東大附属もエリート校化していません。これは教育方針についての保護者に対する説明や、先生方の取り組みの覚悟の程が、保護者や地域に受け入れられたうえでの結果だと考えるべきでしょう。

榊（司会）時間も過ぎてしまいましたが、他に発言ございますか。

山住 「中だるみ」の件ですが、進学中心の私立中高一貫校でよく「中だるみ」が言われます。だとすると一般の中高一貫校で、授業などでそれなりの取り組みがなされていたとして、なお「中だるみ」が観察されるとすれば、それはそれであまり問題にすべきことではないのかもしれませんが。要するに「中だるみ」とはいつの時点のどのような状態を言うのか、じっくり検討することも必要でしょう。

フロア 附属の教師です。私も「中だるみ」問題には関心を持ってきました。思春期に興味関心が広がる、ということとも重なり合っているのでしょうか。例えば中学時代に、勉強をさぼって映画ばかり見るというように。つまり、「中だるみ」といっても、長い目で見れば、何らかの意義がないとは言えません。ただ教師としては、それが教科の学習に帰ってくるような取り組みが必要なのでしょう。

榊（司会）時間があればまだまだ討議は発展すると思いますが、この辺で閉じさせていただきたいと思います。最後に司会の立場から感想を一言申し上げます。山住先生もおっしゃったように、すでに50年が過ぎているわけですから、時代の要請に応じて制度を作り替えていくことも必要だと思います。行政側には中等教育学校を一定数に抑えるという考えもあるようですが、地域の要望があれば無理に制限することはないのではと思います。イギリスのコンプリヘンシブスクールも、区切りはいくつかあるにしても中高一貫教育で9割方普及しているわけですから。私も附属の校長としていろいろ問題を抱えているのですが、司会をしながら多くのことを学びました。本日は、基調提案の山住先生をはじめ、報告者の永友、山岡、丸山の三先生、そしてコメントーターの安彦先生、ありがとうございました。土曜日の午後にも関わらず、会場にお越し下さった多くの方々にもお礼申し上げます。（拍手）